

特集

避妊法—新たな選択肢—

企画者のことば

末岡 浩*

わが国において少子化が進むなか、改めて新たな生命の誕生が国の財産として叫ばれるようになった。その一方で、女性が産み時を考え、選択肢として安全な妊娠・出産のコントロールへの対応も産婦人科医として対峙しなければならない社会の求めである。

経口避妊薬は、世界の流れのなかで、わが国が遅れて開始された歴史がある。しかし、新たな時代の幕開けとして開始された経口避妊薬も運用されて以来、すでに20年余が経過し、この間に薬剤の改良や新たな技術の開発によって選択肢も幅広くなり、近年ではさらなる新しい製剤が提供されるようになった。

具体的にはこれらの薬剤が避妊を目的としての使用のみならず、子宮内膜症、月経困難症、過多月経への治療薬として適用が拡大され、疾患の治療薬としても用いられるようになった。その効能が主たる避妊効果以外にも副次的な効果を期待し、皮膚の尋常性痤瘡(いわゆるにきび)や未婚の排卵障害に対するカウフマン療法に代わる投薬治療法としてなど、臨床場での有益性が認められ、用いられているのが実情で

ある。

デバイスについても進化があり、徐放剤としての黄体ホルモン作用を付加した子宮内器具も発表され、内服ホルモン剤と同様に避妊効果以外にも、婦人科疾患への治療を目的とする使用法へ広がりを見せるなど、多様な目的で使われている。

一方、通常の避妊法とは別に緊急避妊的に避妊を要する事例に対しても新たな薬剤が開発され、ヤッペ法に加えてノルレボ法が運用されるようになり、臨床場で選択肢が広がりつつある。

これらの新たな製剤の選択肢の拡大に伴い、これらを熟知しておく必要が求められている。産婦人科医が臨床場で適切な対応をするために、また必要な最新の知識と幅広い理解を得るために、わかりやすく解説する本特集を企画した。

深い知識と経験を有する専門家による解説を網羅した本書が、常日頃の臨床場で、座右の書として利用していただけることを切に望む次第です。

*K. Sueoka 慶應義塾大学医学部産婦人科学教室(准教授)